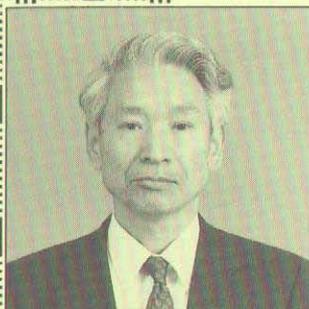


何を研究すべきか

副会長 安達 三郎



“何を研究すべきか”は研究者自身はもとより、研究指導者、研究管理者にとっての永遠のテーマである。適切なテーマを選ぶことができたなら、その研究はすでに半分は成功しているといえるだろう。ヘルツの場合、指導教授であったヘルムホルツから気の進まぬ(?)研究テーマを与えられたのだが、次第に実験にのめり込み、ついには電磁波の最初の実験的検証者としての不滅の名をとどめることになったのである。ヘルツ23歳のときの仕事である。これに似た例を、かつての八木秀次教授と宇田新太郎講師(29歳)の関係にも見ることができる。これらに限らず、奇想天外といえるような仕事は、二、三十代の若い研究者によってなされることが多い。これは若者の自由な発想力や推理力(黒川副会長:学会創立75周年記念特集号)に起因している。

“何を研究すべきか”が極めて重要なことはわかっているが、研究テーマを自由に選べる立場にいる研究者は少ない。大学の卒業研究や学位取得のための研究の多くは指導教授の指示に従うことが多い。企業の研究所に入れば、企業の方針に従って、限られた分野の限られたテーマの中から選ぶことになる。普通、駆け出しの研究者は何をどのように研究したらよいかを判断するための知識と経験に乏しいからである。ある程度自由にテーマを選べるのは、名をなした大学の教師や、研究所の上級研究者くらいかもしれない。一方、このような知識と経験に富んだ研究指導者は、過去の経験にとらわれて、逆に、不適切な助言を与える危険性も多分に持っている。部下にあまり口出しをせず、自由にやらせて良い結果を産み出す場合も少なくない。しかし、一般には、研究助言者と研究者の間の幸運な素晴らしい関係が研究の成功につながるが多いように思う。

“何を研究すべきか”を決定するための普遍的な方法や指針を述べることは、上述したように、仕事を実際に成功に導くのと同じくらいに難しいことであるが、逆に、研究すべきでないことに関して次のようなことだけはいえると思う。1.目的のはっきりしない研究はやらない。2.重箱の隅をほじるような研究はやらない。3.皆んながやっている研究の後追いはやらない。4.テーマを上げ過ぎない方がよい。精力が分散するからである。5.信念を持って辛抱強く研究テーマを追うが、失敗も多分にあり得るから、研究を打ち切る潮時を見失わぬことである。